

# 社会的スキルの自己評価と他者評価の一致について

内 藤 誼 人\*<sup>1</sup>

## Congruence between Self-Evaluation and Other-Evaluation Based on Social Skills

NAITO Yoshihito

### Abstract

Previous research on participants who are not self-acquainted has demonstrated discrepancy as well as congruence between self-evaluation and other-evaluation. This study hypothesized that in this apparently contradictory context, “social skills” is a parametric variable. The empirical results verified this hypothesis: participants with low social skills self-evaluated congruently with the others’ evaluations of them, whereas those with high social skills evaluated themselves incongruously from others’ evaluations of them.

[Keywords] self-evaluation, other-evaluation, social skill

### 問 題

私たちが自分自身に対して抱く評価（自己評価）は、他者から下される評価（他者評価）と一致することもあれば、食い違うこともある。

全体的な傾向としては、自己評価と他者評価とは一致することを示す研究が相対的に多いが（たとえば、Chara と Chara, 2009; Funder と Colvin, 1988; Goudas ら, 2009）、自己評価と他者評価が食い違う結果を示す研究も決して少なくはない（Oh と Berry, 2009）。

なぜ、自己評価と他者評価が一致することもあれば、食い違うこともあるのだろうか。従来の研究結果が必ずしも一貫していないことに関しては、「お互いの親しさ」という媒介変数から、そのメカニズムが説明されてきた。すなわち、お互いにまったく面識がない者同士では、自己評価と他者評価が食い違ってもおかしくはなく、お互いによく知りあっている関係では、自己評価と他者評価は一致するというのである。

Carlson ら（2011）は、まったく面識がない場合には、自己評価と他者評価には相関が見られなかったが、平均2.27年の付き合いがある知人による他者評価と自己評価の相関は高かった、という報告を行っている。同様に、Funder と Colvin（1988）も、面識がない人より、その当人をよく知る2人の友人からの他者評価は一致することを示している。

お互いの親しさという点では、友人だけでなく、家族からの他者評価も自己評価と一致する傾向があることが明らかにされている。たとえば、Chara と Chara（2009）は、本人の自己評価と、妻や子供の他者評価には、非常に高い相関が見られることを示している。

さらに、お互いの親しさという点では、ヘアスタイリストの自己評価と、そのお店に良く通う常連客からの他者評価にも高い相関が見られたという研究もある（Madjar と Ortiz-Walters, 2008）。知人や家族とは違って、常連客であれば面識が深く、そういう人の他者評価は、やはり自己評価と一致するのであろう。

自己評価と他者評価が一致したり、食い違ったりするのは、「お互いの親しさ」という媒介変数の存在によって決定されるという説明は、たしかに理解しやすい。

---

\* 1 立正大学心理学部特任講師

ところがその一方で、お互いに面識などなくとも、相手のパーソナリティや行動傾向は、他者からわりと正確に言い当てられてしまうという研究もある（Backら, 2010; BoyatzisとSatyaprasad, 1994; HuntとLin, 1967; LaurentとHodges, 2009など）。つまり、まったく面識がなくとも、自己評価と他者評価が一致することが示される研究も少なくないのである。

「お互いの親しさ」という媒介変数だけでは、自己評価と他者評価の食い違いを説明し尽くすことはできないように思われる。そこには当然ながら、他の媒介変数の存在が仮定できよう。

そうした媒介変数のひとつに「ナルシズム」がある。Back (2010) は、お互いに面識のない大学生に、みんなの前で簡単な自己紹介をさせ、人気度に関する自己評価と他者評価を求めたところ、ナルシズム得点の高い人ほど自己評価と他者評価が一致した、という結果を報告している。ナルシストは、魅力的な表情や自信のある身振りなどの表現能力に優れている。そのため、ナルシストは自分でも「私は人気がある」と思っているし、他人からも「彼は人気があるだろう」と評価され、自己評価と他者評価が一致したのではないかと考えられる。

本研究では、Backら (2010) の知見に基づき、お互いに面識のない状況において、自己評価と他者評価が一致する媒介変数として、さらに「社会的スキル」があるのではないかとの仮説をたてた。

すなわち、社会的スキルが高い人は、たとえ初対面に近い状況であっても、うまく自己表現をすることができ、自己を他者に上手に伝えることができる。そのため、自己評価と他者評価は一致すると予想される。逆に、社会的スキルが低い人は、自己表現が下手であるため、自己評価と他者評価は食い違っていると予想される。

本研究の目的は、この仮説の検証を行うことである。具体的には、「社会的スキルの高い人の場合、自己評価と他者評価は一致するが、社会的スキルの低い人の場合、自己評価と他者評価は食い違いが大きい」という仮説を検証することが、本研究の目的である。

## 方 法

### 1. 被験者

都内の私立大学のプレゼンテーション・スキル・トレーニングの科目を履修している2クラスの学生58名（内訳は男性15名、女性43名）を被験者とした。被験者は、すべて大学一年生である。

### 2. 手続き

実験は、第1回目の講義において行われた（2012年4月6日）。4月1日に入学式が行われたばかりであり、お互いの面識はほとんどまったくなかったものと考えられる。まず始めに講義担当者から「人間関係の能力を測定するテスト」という説明がなされた後で、KiSS-18（Kikuchi's Social Skill Scale）を実施し、すべての被験者の社会的スキルを測定した。なお、この尺度は18項目である（Appendix 参照）。学生自身に、質問に対して、「いつもそうだ」を5点、「いつもそうでない」を1点として全項目の合計点を算出してもらい、それを社会的スキルの尺度とした。最低点は18点、最高点は90点である。

テストが終わってすぐに、6人から7人を1組とするグループをランダムに作らせ、お互いに自己紹介をするというゲームを実施した。ゲームは、若干の形を変えて、同じグループで2回連続して行われた。最初のゲームは、自分の名前（フルネーム）を他のメンバーに告げるだけのゲームである。自己紹介は、時計回りに順番に行ってもらい、グループのすべてのメンバーの名前を記憶することができれば、そこでゲームを終了とした。

2回目の自己紹介ゲームでは、自分の名前にひとつだけキーワードを付け加えて、同じように他のメンバーに自己紹介させた。たとえば、「〇〇が好きな内藤誼人です」のような自己紹介を行わせ、先ほどと同じようにすべてのメンバーの名前とキーワードを記憶することができれば、そこでゲーム終了とした。キーワードはなるべくインパクトがあって、相手に自分のことを覚えてもらいやすいものを選ぶように指示した。

次に、すべてのメンバーの名前を紙に書き出してもらい、「先ほど、みなさんが受けたものと同じテストで、それぞれのメンバーが何点をとっていたと思いますか。それを推測してみてください。先ほどのテストは、最低点が18点で、最高点が90点になります。人の能力を推測する力は、対人関係でも非常に重要ですから、できるだけ正確に他のメンバー全員の得点を推測してみてください」と講義担当者が説明した。被験者全員の記入が終わったところで一斉に回収を行

い、実験を終了した。

## 結 果

### 1. 他者評価の整合性の検討

メンバーからの他者評価にはバラつきが予想されたので、スミルノフ・グラブス検定によって外れ値の検出を行ったが、検出された外れ値はゼロであった。そこで次に、メンバー間の他者評価がどれだけ一致しているのかを調べるため、クロンバックの $\alpha$ を求めた ( $\alpha = 0.7183$ )。線形結合は見られず、整合性があると判断し、メンバー全員の平均値をもって他者評価の尺度とした。

### 2. 自己評価と他者評価の平均値の比較

自分自身に対する社会的スキルの自己評価の平均値は、56.3793であった。他のメンバーからの他者評価の平均値は63.3087であったから、社会的スキルに関しては、多くの被験者が過小評価をしていることになる。

学生の多くは、自分のさまざまな能力を控え目に評価する傾向があるが、社会的スキルに関しても同じ傾向が確認されたといえる。ウィルコクソンの符号付順位和検定を行ったところ、有意であった ( $Z = 4.5177, p < 0.001$ )。この結果は、内藤 (2012) を追認する結果である。

自己評価のほうが、他者評価を下回った人数の実数を求めると、58人中40人であった。18名は、自己評価のほうが他者評価よりも高く、それゆえ自惚れた評価をしたことになるが、全体としては、社会的スキルを過小評価していることが確認された ( $\chi^2 = 5.8684, df = 1, p = 0.0154$ )。

### 3. 仮説の検証

仮説の検証を行う前に、全体の自己評価と他者評価がどれだけ一致するのかを調べるための相関係数の有意性検定を行ってみた。自己評価と他者評価には、有意な正の相関が確認され ( $r = 0.2812, p < 0.05$ )、お互いにはほとんど面識のない状況でも、私たちは、相手のことをかなりの程度まで正しく見抜くことができ、それゆえ自己評価と他者評価が一致することが示された。

次に、本研究での仮説を検証するため、まず自己評価に関しての四分位数を求めた。25%にあたる得点は53点、75%にあたる得点は62点であったので、53点以下の学生を「社会的スキル低グループ」(N = 16)、62点以上の学生を「社会的スキル高グループ」(N = 16)として、他者評価との相関を求めた (Table 1)。

Table 1. 自己評価と他者評価の相関に関する有意性検定

	全体	社会的スキル低グループ	社会的スキル高グループ
相関係数	0.2812	0.4061	-0.0465
p 値	0.0325*	0.1185	0.8642

\*: 5%有意

有意性検定の結果、仮説は支持されなかった。有意ではなかったが、むしろ逆の傾向、すなわち社会的スキルの低い人のほうが、自己評価と他者評価が一致する傾向さえ見いだされた。

## 考 察

本研究では、「社会的スキル」に関する次元において、自己評価と他者評価が一致するかどうかを検討した。全体として、社会的スキルに関しては、お互いにはほとんど面識がなくとも、自己評価と他者評価は一致することが示されたといえる。

従来の研究では、お互いに面識がない場合には、相手がどのような人物なのかを推測するのが難しく、自己評価と他者評価は食い違いやすいとされてきた。ところが、本研究の結果は、お互いに面識がなくとも、簡単な自己紹介をするだけで、ある程度まで相手の社会的スキルを推測することができることが示された。

ただし、この結果の解釈については、性差の問題が影響している可能性がある。というのも、本研究の被験者は女性のほうが男性に比べて2倍以上も多かったからである。Laurent と Hodges (2009) によると、女性は共感能力が高く、それゆえ他者の気持ちを読み取る能力が高いという。お互いに面識がなくとも、自己評価と他者評価が比較的一致したのは、被験者に女性が多かったから、という理由も考えられる。

次に、本研究では、「社会的スキルが高い人ほど、自己表現力も高く、それゆえ自己をうまく他者に伝えることができるので、自己評価と他者評価は一致するであろう」との仮説を行ったが、この仮説については、支持されないばかりか、まったく逆の傾向を示す結果が得られた。すなわち、社会的スキルの低い人のほうが、自己評価と他者評価が一致する傾向が得られたのである。

なぜ、社会的スキルが低いグループのほうが、自己評価と他者評価が一致したのであろうか。ひとつの解釈としては、「私の社会的スキルは低い」というネガティブな自己評価を抱えているかどうかは、他者の目からも推測しやすかったのではないか、という理由が挙げられる。

相手のネガティブな部分は、人目を引きやすい傾向がある (Vonk, 1993)。社会的スキルが低い人は、控え目な態度、小さな声、アイコンタクトを逸らす、といったネガティブな行動をとりがちで、そういう行動から、社会的スキルが低いことを容易に見抜かれたのかもしれない。自分から積極的に社会的スキルが低いことを表現するつもりはなくとも、相手にはすぐに見抜かれてしまうのであって、それが自己評価と他者評価が一致することにつながったということは十分に考えられる。

逆に、「私の社会的スキルは高い」というポジティブな自己評価のほうは、他者の目からは、なかなか推測しにくかったのかもしれない。実際、社会的スキル高グループの自己評価と他者評価は、ほぼゼロの無相関であった。

社会的スキルが高いことは、短い自己紹介くらいではうまく表現できなかったという可能性もある。もう少し長く会話をさせるなどをすれば、社会的スキルが高い人の自己評価と他者評価も一致したかもしれない。

社会的スキル高グループに関しては、自己評価のほうが他者評価よりも高い傾向があった。社会的スキル低グループで、自己評価が他者評価よりも高かったのは16人中わずか1人であったが、社会的スキル高グループでは16人中9人だったのである。この結果は、社会的スキルの高い人が自惚れた評価をしがちであるということを示すよりは、むしろ、自分の社会的スキルを、短い自己紹介では「相手に伝えきれなかった」と解釈できるかもしれない。

本研究では、「社会的スキル」を媒介変数として、自己評価と他者評価が一致するかどうかを検討したが、社会的スキルが低い人のほうが、自己評価と他者評価は一致するようである。その背景にあるメカニズムに関しては、さらに今後の研究の課題としたい。

## 引用文献

- Back, M. D., Schmukle, S. C., & Egloff, B. 2010 Why are narcissists so charming at first sight? Decoding the narcissism-popularity link at zero acquaintance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 98, 132-145.
- Carlson, E. N., Vazire, S., & Furr, R. M. 2011 Meta-insight: Do people really know how others see them? *Journal of Personality and Social Psychology*, 101, 831-846.
- Chara, P. J. Jr., & Chara, K. A. 2009 Kamikaze attack survivors: How accurate are their PTSD reports? *Psychological Reports*, 105, 1126-1130.
- Funder, D. C., & Colvin, C. R. 1988 Friends and strangers: Acquaintanceship, agreement, and the accuracy of personality judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 149-158.
- Goudas, M., Magotsiou, E., & Hatzigeorgiadis, A. 2009 Self-and peer assessment of social competence. *Perceptual and Motor Skills*, 108, 94-96.
- Hunt, R. G., & Lin, T. K. 1967 Accuracy of judgment of personal attributes from speech. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 450-453.
- Laurent, S. M., & Hodges, S. D. 2009 Gender roles and empathic accuracy: The role of communion in reading minds. *Sex Roles*, 60, 387-398.
- Madjar, N., & Ortiz-Walters, R. 2008 Customers as contributors and reliable evaluators of creativity in the service

- industry. *Journal of Organizational Behavior*, 29, 949-966.
- 内藤 誼人 2012 自己の人気度とプレゼンテーション能力に対する過小評価について 立正大学心理学研究年報, 3, 59-64.
- Oh, I. S., & Berry, C. M. 2009 The five-factor model of personality and managerial performance: Validity gains through the use of 360 degree performance ratings. *Journal of Applied Psychology*, 94, 1498-1513.
- Vonk, R. 1993 The negativity effect in trait ratings and in open-ended descriptions of persons. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 19, 269-278.

## Appendix

本研究で使用した Kiss-18の全項目

1. 他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。
3. 他人を助けることを、上手にやれますか。
4. 他人が怒っているときに、うまくなだめることができますか。
5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。
6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。
7. こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。
8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。
9. 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。
10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。
11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。
12. 仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。
14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。
15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。
16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。
17. まわりの人たちが自分とは違った考えを持っていても、うまくやっていけますか。
18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。